

刀田 絵美子

一 問題の所在

所謂「連体詞」は、学校文法において取り扱われる他品詞に比べると一品詞として認定され始めた歴史が浅い¹⁾。また、元々は他品詞であつたものが連体修飾語(句)として用いられ、その用法が一般化することで連体詞に転成する場合が多いといわれている。そのため、研究者によって連体詞と認定する語に差が出ることになる。

そもそも、連体詞と認定されうる語にはどのようなものがあるのだろうか。先行研究の多くでは、研究者が「共通して」連体詞と認める語についての記述・分類がなされている²⁾。万人が連体詞と認める語を分析することの重要性は否定すべくもない。その一方で、研究者によって連体詞認定の意見が分かれる語にはどのようなものがあるかを明らかにすること、つまり認定の是非が個人の判断に委ねられる語を記述・分類することもまた、連体詞の基礎研究において有意なことである。

本稿では連体詞と認定されうる語をできるだけ多く収集するため、「日本国語大辞典」³⁾所収の語で連体詞と認定されているもの、また連体詞のように用いると記述される語を調査し得られた語二二二例について分析する⁴⁾。

二 日本国語大辞典所収の連体詞(一) 方言資料で見られる語

日本国語大辞典には近代の方言集・地誌の類、千余点から、約四万五千語が収録されている。このうち、方言資料が典拠として示されている連体詞二九語⁵⁾を左に示す⁶⁾。

あいな(山形・香川・福島など)・あが(和歌山・沖縄)・あぎゃん⁷⁾・あぜえ(鹿児島)・あつたら(岩手・宮城・山形など)・あんな(島根・広島・愛媛など)・いかな(広島・静岡・鹿児島など)・いたみいった(福島・岩手)・いたみった(秋田)・いな(山梨・長野・島根など)・きな(石川・愛知・愛媛など)・くさった(東京都・新潟・富山など)・こぎゃん(鳥取・島根・佐賀など)・こげん(千葉・新潟・三重など)・こな(奈良・島根・山口など)・そんた(岩手・宮城・秋田など)・ついで(の)(岡山)・つくれん(福岡・熊本・大分)・どじれん(筑前・肥後)・とべった(岐阜・愛知)・とんな(岩手・宮城・山形など)・なした(新潟・富山・岐阜など)・なんだ(福井)・にいな(島根・広島・山口など)・ふるな(島根・鹿児島・新潟)・へんなし(山形)・やすからん(高知・長崎)・やだな(兵庫・長野)・りくつ(石川・富山・沖縄)

これらの語については、本稿の考察対象から除いた。

三 日本国語大辞典所収の連体詞(二) 方言資料以外で見られる語

本節では、方言資料以外で見られる連体詞一九三語について、当該語がどのような品詞から転成したものであるかに注目し、分析する。なお、語素から転成した語六例については別に述べる。

分析した結果、用例数が多い順に、動詞から転成した語五八例(副詞と動詞の複合語から転成した語一八例、名詞と動詞の複合語から転成した語一二例が別にある)、形容動詞から転成した語三九例、名詞から転成した語二一例、代名詞から転成した語一九例、形容詞およびその語幹から転成した語一二例(名詞と形容詞の複合語から転成した語一例、動詞と形容詞の複合語から転成した語一例が別にある)、副詞から転成した語二例、感動詞から転成した語一例であった。また、付属語の複合語から転成した語一例、品詞が不明である語一例であった。以下、品詞ごとにどのような語が連体詞として認定されているか確認する。なお、自立語からなる複合語が連体詞に転成したものについては、本節の最後に付記する。

(一) 体言から転成した語

① 名詞

全二一語ある。体言を連体修飾語(句)として用いるためには、当該語に別要素を下接し、接続を起こしやすくする必要がある。名詞から転成した二一語を下接部分に注目して分類すると次の通りである。

1 連体修飾格が下接する語(八語)

- いお(つ) [五百]・くだん(の) [件]・さ(の) [些]・ものが [物]
- ・ものの [物]・じじ(の) [実]・だい(の) [大]・とう(の) [当]・ほんの [本]

2 断定の助動詞「たり」「た」が下接する語(五語)

- かびた [華美]・しゅたる [主]・どんげた [鈍]・な(に)たる [何]
- (音韻変化語形「なんたる」も立項されているが本稿では除く)・なんたら [何]

3 断定の助動詞「なり」が下接する語(一語)

- たんなる [単]

4 その他

漢語は下接要素なしに連体詞となる場合もある。次の四語である。

- げん [原]・げん [現]・げんざい [現在]・どう [同]

また、形容詞の所謂「補助活用」未然形に打消の助動詞「ず」の連体形を下接した「むりからぬ」という語がある。これは、『よからぬ』などに類推して、形容詞ではない『無理』に『からぬ』を付けてできた語」と記述されていたため、本項に入れた。

② 代名詞

本稿では、コソアド系指示語に属する代名詞および人称代名詞からなる連体詞を名詞とは区別した。全一九語ある。一覧すると次の通りである。なお基本語形は枠の右側に置き、変化語形は五十音順に並べた。

指示語	ア系	下接する付属語		
		ーが	ーたる	ーなる
		あんたる	あそこな	あの
				ーの
				あん

・さしたる「指」・させる「指」・さらぬ「然有」・さりぬる「去」
 ・さるべし「然有」^三・さる「去」・さる「然有」・しかるべき「然」
 ・そしらぬ「素不知」・とんだる「飛」・なげいた「嘆」・みとみる「見」・みしらぬ「見不知」・みたよな「見」

② 形容動詞

全三九語ある。まず変化語形を示す。

《音韻変化語形》

いかな — いかな・いつかな
 いろんな — いれんな
 おおきな — おおつきな・おほけな
 こがい(な) — こぎやあ(な)・こげえ(な)
 そがい(な) — そがな・そげえ(な)・そない(な)
 ちいさな — ちいちな・ちいつさな・ちつさな
 どがい(な) — どない(な)
 ひよん(な) — ひよがいな・ひよくな・ひよこな
 ひよっかいな・ひよんげな
 みじかな — みじつかな

形容動詞から転成した語には音韻変化語形が多い。これらを除いたものは次の通りである。

あじた「味」・いかなる「如何」・いな「異」・いなげ(な)「異気」・いろんな「色」・おおきな「大」・おかしな・こがい(な)

・さらなる「更」・そがい(な)・ちいさな「小」・でつかな・どがい(な)・ひよんな・みじかな「短」

③ 形容詞およびその語幹から転成した語

全一二語ある。このうち、形容詞連体形から連体詞に転成したものは「くしき」「奇」「なき」「亡」「まったき」「全」の三語である。また、打消の助動詞「ず」の連体形が下接した「すくなからぬ」も連体詞と認定されている。

一方、形容詞の語幹に連体修飾格が下接したものは「とおつ」「遠」「とおの」「遠」「ながの」「永」の三語、形容詞の語幹が連体詞に転成したものは「あたら」(音韻変化語形「あつたら」「可惜」も立項されているが本稿では除く)、「にんげな」(形容詞「似気無し」の語幹「にげな」の音韻変化したものが連体詞化したもの)の二語である。

ほかに、動詞「端無く」を形容詞「端無し」と意識して作り出された語(以上は日本国語大辞典の記述による)「はしなき」がある。また、形容詞「覚束無し」の「なし」を打消の助動詞と誤り、連体形に活用したという「おぼつかぬ」も連体詞のように用いるとされる。

(Ⅲ) 修飾語から転成した語

「しかき」「然」と「たった」の二語である。「しかき」は日本国語大辞典で、副詞「しかく」を形容詞の連体形と解したところから生じた語かと記述されているため、本項に分類した。また、「たった」は副詞「ただ」の強調語形で、連体詞に転成したものである。

(IV) 独立語から転成した語

「あっぱれ」の一語である。この語は一般的に感動詞として解釈されることが多いが、体言の上に付き連体詞的に用いられることが日本国語大辞典に記述されているため、本項を立てた。

日本国語大辞典では連体詞「あっぱれ」の用例として、覚一本平家物語・巻九「二度之渡」の、「あっぱれ剛の者かな」を引く（傍線は稿者による。以下全て同じ）。これは、新中納言（平知盛）が眞名邊四郎・五郎兄弟に対してかけた賞賛の言葉である。新編日本古典文学全集では「ああすばらしい剛の者だ」と訳されている¹²。

覚一本平家物語では「剛の者」に上接する「あっぱれ」の例が他に二例ある。

まず、巻四「信連」には、並みいる平家の侍の言葉として「あっぱれ剛の者かな」という用例がある¹³。これも巻九「二度之渡」と同様に訳されている。

一方、巻八「瀬尾最期」では、前述の新中納言（平知盛）の言葉と同じ表現が木曾義仲の言葉として述べられている。これは「あっぱれ、剛の者であるな。」と訳されており¹⁴、連体詞ではなく感動詞として解釈されているように見受けられる。

(V) 付属語から転成した語

断定の助動詞「なり」未然形に接続助詞「で」が下接した「ならで」という語が「ならではの」の形で用いられる時、「その性質を持ったものに特有の、の意を表す」（日本国語大辞典の記述による）。

今回調査したなかで、付属語からなる語で連体詞的に用いられる語はこれ一語であった。

(VI) 出自が不明な語

「おほし」という語は日本国語大辞典によると、「すべての。大体の。」という意味で用いられる連体詞である。用例は「源氏物語」少女の「おほし|かいもとあるじはなはだひざうに侍りたうぶ」を引く。

また補注に、「語根『おほ（凡）』からの派生語か。（稿者注・日本書紀）『書紀』仁徳

一年一〇月』に見える『全匏 オフシヒサゴ』の訓、『色葉字類抄中』にあげる姓の名の『凡河内 オフシカウチ』『凡海 オシアマ』などの『おふし』『おし』と同語で、体言に冠して用いたようである」という。この注から、語素「おほ（凡）」に「し」（品詞等不明）が下接した語として「おほし」を捉えていると考えられる。

日本国語大辞典が引く源氏物語の用例を確認してみよう。これは、夕霧が入学した大学寮の博士（儒者）の言葉である。新編日本古典文学全集『源氏物語』では当該箇所に対して「およそ相伴役の方々ははなはだ不作法でおわせられる。」と訳をつける。また頭注に「『凡（おほ）そ』の転。『はなはだ』『非常』とともに漢文訓読調の男性語。儒者らしい言葉づかい。」¹⁵という。

新編日本古典文学全集は大島本と呼ばれる写本を底本としている。これは青表紙本と呼ばれる系統の一種である。同じく大島本を底本とする新日本古典文学大系『源氏物語』の本文も確認しておく。新日本古典文学大系では、「おほし|垣下あるじ、はなはだ非常に侍りたうぶ」という本文に対し、「博士の言。およそ相伴役の方々は、はなはだもつてのほかでおられます。『おほし』は『凡（おほ）そ』の転。『はなはだ』『非常』とともに、漢文訓読調で儒者らしい言いまわし。（後略）」と注をつける¹⁶。

このように、大島本を底本とした注釈書では「おほし」を「おおよそ」の異語形と解釈する。「おおよそ」の異語形であるならば、本稿

の分類に従えば修飾語（副詞）から転成した語となる。

ただし、発話者が博士（儒者）であることから、各注釈書は、注において「おほし」を所謂漢文訓読語のように取り扱っていることには疑問が残る。それは、訓点資料で使用される語をまとめた築島裕編『訓点語彙集成』において「すべての。大体の。」の意を持つ「おし」「おほし」は立項されておらず、「凡」の訓に「おし」「おほし」がないためである。本当に連体詞「おほし」が存在したのか、確認する必要がある。

まず、大島本と同じ青表紙本系統で、日本大学蔵三条西家本を底本とする日本古典文学大系『源氏物語』を見た。本文は「おほし、かいものあるじ、はなはだ非常ひびょうに侍りたうぶ」となっており、頭注に「凡そ—おほし（大体）、上達部たちが相伴の人の座席について、饗応じやうを受ける事は、甚だ稀（非常）—例外で御ありなさる。『上達部殿上人達が、儒者等の中に加わるのは、身にあまる忝い事である』と、儒者等が、酒にも酔い威張っても言うのである。（中略）『おほし』『甚だ』『ひびょう』などは、一般的には用いなかったが、儒者は漢文に慣れているから用いた。（後略）」とある。¹⁷

また、青表紙本とは別系統の写本に河内本と呼ばれる資料群がある。河内本系統の蓬左文庫蔵「尾州家河内本」の影印を確認したところ当該箇所は「をし右傍「非常」いかいもとあるしはなはた右傍「侍」ひさう右傍「稀」にはへたふ」とある。¹⁸傍線部「をし」は前述の日本国語大辞典・補注で同語として挙げられていたものであろう。

また、青表紙本と河内本ならびに別本の取り合わせ本といわれる飯島本では「おほし右傍「侍」いかいもとあるしはなはた右傍「非常」ひさう右傍「稀」に侍りたうぶ」となっており、この箇所については青表紙本系の本文であった。¹⁹

以上、各系統の写本比較を通して「おほし」という語が誤写ではな

いことが分かった。

しかし、源氏物語前後の訓点資料で「おほし」「凡」が認められないこと、また万葉集から徒然草まで一四種の和文資料の語彙を集めた宮島達夫編『古典対照語い表』（第一版・フロップイー版）において連体詞「おほし」は源氏物語の当該例のみである（しかも同書ではこれを副詞と認定している）ことから、問題が残る語であるため、本稿では出自が不明な連体詞とした。

〈付記〉自立語からなる複合語から転成した語

1 副詞十動詞 …（一八語）

どのような副詞がどのような動詞と複合語を作り、連体詞に転成したかという観点から検討すると、コソアド系指示語に属する副詞に「言う（言った）」または「した」を下接した諸語が連体詞と認定されているということに気付く。まとめると次の通りである。

指示語	下接する動詞		
	ア系	コ系	ソ系
ア系	ああいう	こいう	さういう
コ系	こいう	こいう	さういう
ソ系	さういう	さういう	さういう
ド系	さういう	さういう	さういう
	—いう	—いった	—した

右に挙げた語を除き、本項に分類される連体詞は次の通りである。

えさらず「得不避」・えしれぬ「得不知」・えしれもない「得知無」・おおそれた「大外」・とした・とある

2 名詞十動詞(一二語)

変化語形は次の通りである。

《音韻変化語形》

たいしたる — たいした

だいそれたる — だいそれた

なんじよう — なんじよう

《異活用語形》

そこしれない — そこしれぬ

変化語形を除き、本項に分類される連体詞は次の通りである。

いそたる「五十足」・こころある「心有」・そこしれない「底不知」

・たいしたる「大」・だいそれたる「大外」・なんじよう「何」・な

だたる「名立」・べした「別」・ほねぼねした「骨々」

3 名詞十形容詞 … (一語) … ころない「心無」

4 動詞十形容詞 … (一語) … あくなき「飽無」

四 おわりに

本稿では、連体詞と認定されうる語をできるだけ多く収集することを目的に日本国語大辞典での調査を行った。日本国語大辞典を調査したことで、方言資料に見られるものや変化語形としてどのような語があるか明らかにした。

本稿では方言資料に見られる連体詞を考察対象としなかったが、近年、方言に対する社会的関心が高まり、教室で方言を取り上げる機会

が増えてきた²⁰。一方で、文法単元は共通語を例文として行われることが多い。全国で使用されるという教科書の前提や共通語指導の必要性はさておき、従来の文法学習は学習者のことばの実態にそぐわない、そのため意欲をもって学習に取り組めない側面があったことは否めない。しかし、方言語彙収集の成果を文法的な学習に生かす単元を構想することで、学習者は地域のことばを科学的に分析する視点を持つことになる。それによって、ことばへの関心、文法学習への意欲を引き出せるのではないかと考えている。

なお、前節は品詞別に分析したため述べなかったが、日本国語大辞典では語素から転成した語六例を連体詞的に用いることが述べられていた。左に挙げる。

1 連体修飾格が下接する語 … ところ「常」・とよ(の)「豊」

… への「新」・むかつ「向」

2 外来語を由来とする語 … イタリアン・スパニッシュ

日本国語大辞典では凡例において「語素」を「造語要素としてはたらきのある和語・外来語」と定義している。しかし、「イタリアン」「スパニッシュ」を連体詞と扱うにも関わらず、類似した他の語(例えば「アメリカン」「フレンチ」など)は本稿において連体詞として取り上げることができない。これは、辞書記述に差があるためである。例えば、「イタリアン」は次のように記述されている。

イタリアン〔語素〕(〔英〕Italian)

イタリアの。イタリア風の。常に他の名詞の上に付いて連体詞的に用いられる。「イタリアンスタイル」

傍線部「連体詞的に用いることがある」と記述されることから本稿では「イタリアン」を連体詞と認定した。それに対し「アメリカン」は次のように記述されている。

アメリカン〔語素〕(〔英〕 American)

他の外来語の上について、「アメリカ合衆国の」「アメリカ合衆国式」「アメリカ合衆国風の」の意の複合語をつくる。

このように、類似した語であるにもかかわらず、一方は「連体詞的に用いる」語、一方は複合語の前部要素と認定されているため、本稿では一元的に取り上げることができなかった。

日本国語大辞典は元々が大部な辞書であるため、語によって執筆者が異なり、そのために記述に揺れが生じている。右の問題はそれを示すものである。一方、本稿は日本国語大辞典を有用なコーパス(言語資料体)として使用した成果ともいえる。これは日本国語大辞典の情報電子化したことによって、単に意味を調べるだけでなく、日本語研究における様々な利活用の可能性を示している。ただし、検索による調査に終了するのではなく、実際の資料に立ち戻って個々の用例を検証したり内省したりすることを通して、用例を精査・補完する必要がある。

さて、先にも述べた通り、連体詞は一品詞として認定され始めた歴史が浅く、また他の品詞に比べ数が少ないためか、研究が遅れている分野である。そのため、検討するべき課題が多く残っている。例えば、同じ意味内容を表す異活用語形に位相差が存するのか、辞書で他品詞として立項されている語を連体詞的に用いる際に位相差が存するのかなど、当該語の位相に注目した研究を今後も行っていく必要がある。

引用参考文献

【電子資料】

JapanKnowledge・日本国語大辞典・トップページ

<http://www.japanknowledge.com/individualsearch/displaymain>

宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄『フロロピー版古典対照語い表

および使用法』笠間書院 一九八九

【辞典類】

小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典 第二版』小学館 二〇〇〇

〇—二〇〇一

宮島達夫編『古典対照語い表』笠間書院 一九七一

飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺編『日本

語学研究事典』明治書院 二〇〇七

築島裕編『訓点語彙集成』汲古書院 二〇〇七—二〇〇九

【論文】

小松寿雄「連体詞」の成立と展開—研究史・学説史の展望—(鈴木

一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座5』明治書院 一九五三)

井上誠之助「副詞と連体詞」(明治書院編『続日本文法講座1』明治

書院 一九五八)

井手至「連体詞」(時枝誠記・遠藤嘉基監修『口語文法講座6』用語

解説編』明治書院 一九六五)

鈴木英夫「連体詞の諸問題—研究史的視点を含む—」(鈴木一彦・林巨

樹編『研究資料日本文法④修飾句独立句編』明治書院 一九八四)

注

*1 「連体詞」の名称や定義については小松寿雄（一九五三）や井手至（一九六五）に詳しい。

*2 一般的に連体詞は三十語程度であるとされる。鈴木英夫（一九八四）では岩波国語辞典（三版）、広辞苑（一版）、日本国語大辞典（記載はないものの執筆年代から考えて一版）など八種の辞書で共通して連体詞と認定されている語を抽出し、一般的に連体詞として考えられている語を明らかにしようとした。そして、八種の辞書で認定された二十一語（あくる、あらゆる、ある、いかな、いかなる、いろんな、いわゆる、おおきな、かかる、かの、来る、きたる、させる、去る、大した、とある、とんだ、名だたる、ひよんな、本の、わが）および七種の辞書で認定された六語（あの、この、その、どの、大それた）が一般的に連体詞と認定される語とした。

*3 本稿では「日本国語大辞典 (JapanKnowledge 版)」を指して「日本国語大辞典」という呼称を用いる。web上で公開されている「日本国語大辞典 (JapanKnowledge 版)」は現段階で最多収録語数を誇る「日本国語大辞典」を元に、約五十万項目について記述した国語辞書である。

*4 例えば、「なべて」という副詞には「なべての」の形で、連体修飾語として用いることも多いという記載がある。このような用例は、連体詞以外の品詞で立項されていること（「なべて」の場合は副詞）、「連体修飾語」という文法用語を用いて語の特性を説明しようとしているところから本稿では考察対象としなかった。

*5 地域によって語形が異なっている辞書の見出しとしては一つにまとめられている場合がある。本稿もそれに従い、地域によって語形が異なる場合であっても代表的な一語にまとめて示す。

*6 以下、用例の一部を括弧で括ったものがある。これは日本国語大辞典において他品詞として掲載され（括弧をつけていない部分）、ある部分が付け加わることで連体詞と認定される語であることを示している。付け加わることで連体詞と認定される部分を本稿では括弧に括って示すこととする。

*7 日本国語大辞典は、徳富蘆花「黒い眼と茶色の目」の「彼様アギヤンお転婆は何ぼするか分かりませんばい」を用例として引く。これは、年を取った女中の言葉である。彼女の出身地は本文に示されていないが、主人公が青年期の蘆花を、下宿先の主が徳富家の親戚・横井時雄（プロテスタントの一派・熊本バンドの一員で同志社の社長（総長）も務めた人物）をそれぞれモデルとしているところから、九州地方出身の人物だと推測される。日本国語大辞典はこの語を採録する際に方言資料を典拠としておらず、そのため、方言語彙としては分類されていないが本文を確認すると、発話者の出身者を意識させるような表現となっており、ここに限っては方言語彙と認められること、類似の音韻変化を起こしたと考えられる「こぎゃん」が方言語彙に分類されていることから、本節で挙げることにした（徳富蘆花著・伊藤整編『豪華版日本現代文学全集5 徳富蘆花』（講談社 一九八一）所収の本文を参考にした）。

*8 音韻変化を起こした語のうち、音韻変化を起こす前の語形と起こした後の語形の両方が日本国語大辞典に掲載されている場合に、《音韻変化語形》とした。したがって、例えば「かかっし」は動詞「かかり」「斯有」に過去の助動詞「き」の連体形が接続した「かかりし」の変化したものであると日本国語大辞典には記述されているが、音韻変化を起こす前の語形が連体詞として立項され

ていないので、《音韻変化語形》には分類しない。なお、語の掲載は音韻変化を起こす前の語形を筆頭語とし、以下は五十音順に挙げることにする。

*9 ある語を強調した表現のうち、強調する前の表現と強調した後
の表現の両方が日本国語大辞典に掲載されている場合に、《強調
語形》とした。したがって、例えば「みと見る」は「見る」を重
ねて強調した表現と日本国語大辞典に記述されているが、強調す
る前の表現が連体詞として立項されていないので、《強調語形》
には分類しない。なお、語の掲載は強調する前の表現を筆頭語と
し、以下は五十音順に挙げることにする。

*10 打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」ならびに「ざる」が同じ用
言に下接し、二活用形がそれぞれ連体詞と認定されている場合、
《異活用語形》とした。掲載は五十音順による。なお、打消の助
動詞「ない」がそれらと同じ用言に下接した語形が連体詞と認定
されている場合は、それも挙げる。

*11 日本国語大辞典「さるべし」の項には「さるべき」の形で連体
詞的に用いることが多いと注がついている。本稿は見出し語を掲
載することを原則としているため、本文には「さるべし」形を掲
載し、実際に連体詞として使用される際の語形についてここに注
記する。同様の問題は、副詞と動詞の複合語から転成した「えさ
らず」（日本国語大辞典には、打消の助動詞「ず」が副詞の場合
は終止形に、連体詞の場合は連体形「ぬ」に活用すると記述があ
る）でも指摘できる。

*12 市古貞次編『新編日本古典文学全集 平家物語一』小学館 一
九九四 二九〇頁

*13 市古貞次編『新編日本古典文学全集 平家物語二』小学館 一

九九四 二一五頁

*14 12に同じ 一三八頁

*15 阿部秋生・今井源衛・秋山虔・鈴木日出男編『新編日本古典文
学全集 源氏物語三』小学館 一九九五 二四頁

*16 柳井滋・大朝雄二・藤井貞和・室伏信助・鈴木日出男・今西祐
一郎編『新日本古典文学大系 源氏物語二』岩波書店 一九九四
二八四頁

*17 山岸徳平編『日本古典文学大系 源氏物語二』岩波書店 一九
五九 二七九頁

*18 名古屋市蓬左文庫原本所蔵・監修『尾州家河内本源氏物語四』八
木書店 二〇一一 六二頁

*19 池田和臣編『飯島本源氏物語④』笠間書院 二〇〇九 一九六頁

*20 小学校の実践として余健「方言調査の結果を授業に生かす―四
日市市水沢地区に焦点を当てて―」（『三重大学教育学部附属教育
実践センター紀要』二〇一一）、中学校の実践として上江洲朝男
「中学校国語科における方言に関する授業研究」（琉球大学こと
ばと教育研究会編『ことばと教育 一号』二〇〇七）などが報告
されている。また、勤務校区の方言を学習材にすることを前提と
した方言調査の報告（菅野理恵「福島県達南地域の方言の研究―
「方言と共通語」教材の授業での活用を目標にして―」福島大学
国語教育文化学会編『言文 五九号』二〇一一）もある。地域に
根ざした方言学習材の開発が求められている。

（奈良工業高等専門学校・専任講師）